

## 厄払い



ある秋晴れの朝、すがすがしい気分であつて夫と入来峠を走つていた。峠の上で登坂車線が合流し、下り坂に差し掛かつたとき、道脇に立つた男が手招きをする。何だろうとその指示に従つて横道に入ると、速度オーバーだといふ。制限速度が50キロで、ウチらの車は73キロ。20キロまでは許容範囲だが、3キロ超えていて罰金1万5千円とのことだ。私たちは、何もスピードを出していた気もしていなかつたし、途中追い抜いて行つた車はもう見えないというのに。

説明によると、なんでも調べている地点で

瞬間オーバーしていたのであつて、途中などは関係ないのだそう。何か運悪く引つ掛けたらという後味の悪い思いがした。

その話をした若い人の言。

「測定している電波を感知する器械があつて、それを着ければ測定していることを知らせてくれるから、そこで速度を落として無事通過することが出来ます。1万5千円もあれば買えますよ」

娘の話では、普通は対向車が合図してくるはずだといふ。あいにく峠には対向車は走つていなかつた。それにしても3キロで1万5千円はきついのではないかしら。

一般化するといふ道路財源の中に罰金の収入の項目もあつた。その中に弱いものいじめみたいな1万5千円も入るんだなあと思つた。私たちの運転免許証の取得は、昭和四十年。まだマイカーはちらほらという時代だつた。

当時、中央線の豊田駅近くに教習所が出来て、

そこにある多摩平団地の若い奥さんの間で免許を取ることがブームになった。私もその一人で負けじと練習に通った。夫も一ヶ月ほど遅れて練習を始めた。そして相次いで免許証を手にした。

マイホーム預金として給料天引きの社内預金をはたいて、出たばかりの白いカローラを買った。それに子供たちを乗せてよく郊外をドライブしたものだ。その車は夫が鹿児島に単身赴任したとき、車庫代が高かったこともあつて手放したのだが、思えばあの時点で免許を取っておいたことが、車がなくては手も足も出ない今の入来の生活で本当に役立っている。

その後二十五年間、全くハンドルを手にしたことがなかったから、無事故、無違反、ワールドの免許証であつた。夫より一年早く入来で姑との生活を始めた私は、わたし用の軽自動車がおトマチックだったので、クラッ

チの代わりにブレーキを左で踏むのかしらと思つた程の怪しげなドライバーだつた。それでも無茶はしない臆病さのおかげで、大した事故もなく今日まで来ている。

先日、十一月の誕生日前に免許証の書き換えの通知が来た。今やゴールドでなくなつて、三年ごとの書き換えである。

何年か前になるが、隈之城に食料買出しに行つての帰り道で、パトカーに追われたことがあつた。まさか自分とは全然思わなかつた。昔は義務ではなかつたベルトもちゃんと締めている。それが追つているのはどうやら私らしいと気付いて、道路脇に止めた。信号無視ということだつた。私は信号というものは、交差点の柱に着いているものとはかり思つていたのに、道路の真ん中につるされた赤い信号が点滅しているとこでは、一時停止しなければ違反なのだという。田舎では頭上にも注意ということで、六千円の授業料を払つて、

ゴールドでなくなってしまうのだった。

今度の書き換えには、事前に高齢者のための講習を受けなければならぬという。近くの教習所から連絡があつて、ある日の午後受講のために出掛けた。

自分のことはさておいて、集まつた女性四名と男性二名確かに高齢者というにふさわしく思えた。指導員はお年寄りの扱いには手馴れた感じで、面白おかしく運転の危険などについて話してくれた。確かに一瞬の不注意が車を凶器に変えうるのだ。どんなに注意しても過ぎることはない。

講話のあとは、視野のテストと反応力のテスト、実地の運転指導があつた。幸い私はパソコンなどで目を酷使しているからか、視野は50歳台だとほめられた。あとはまあまあというところだった。

視野をほめられて気が緩んでいたのだろうか、先週セラ駐車場の料金所の角に右をコチ

ンとやってしまった。家で見るとコチンのつもりがバンパーまで凹んでいた。バンパー取替えでまたウン万円。夫は厄払いだといふけれど、このところ厄払いばかりしている私である。

